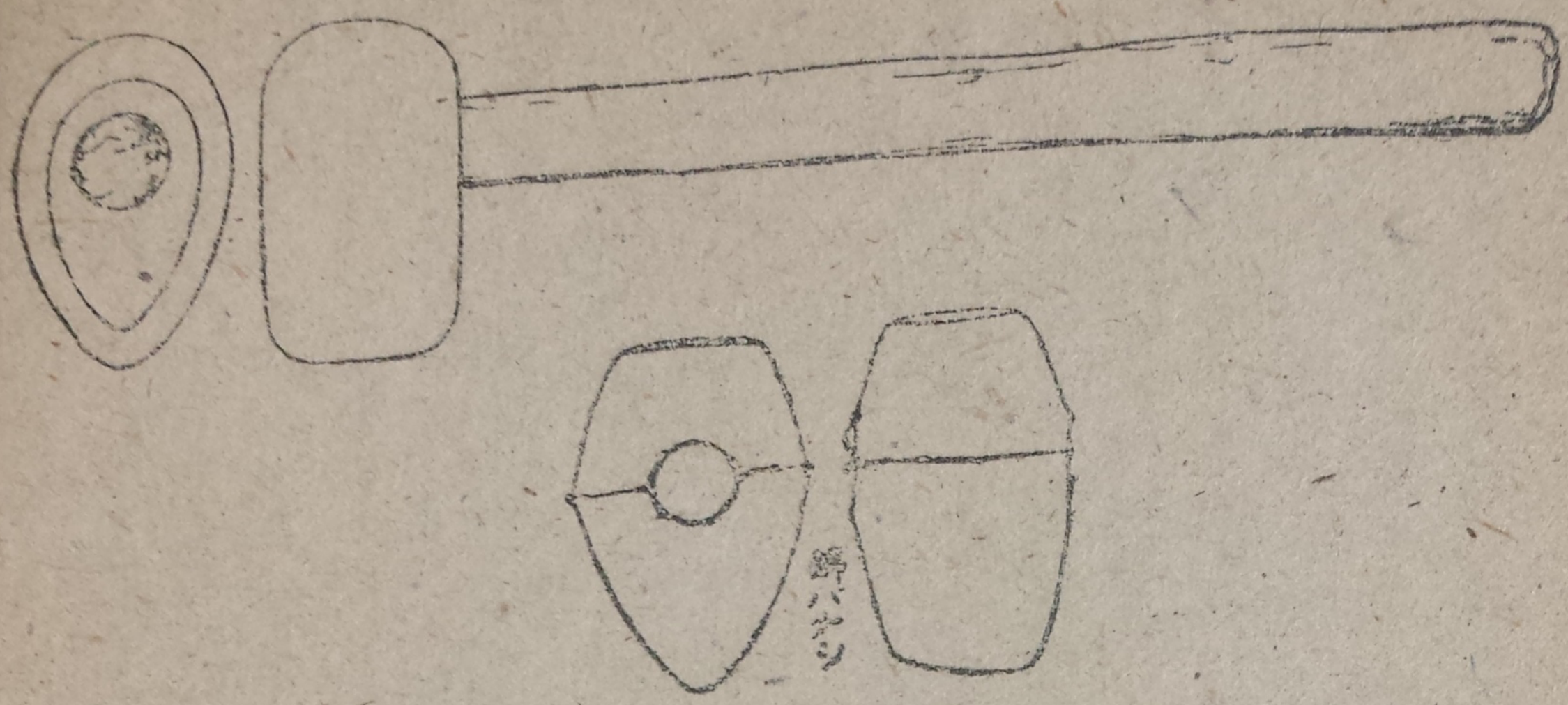

槌子

水野清一

大同の石炭は有名であるが、それは單なる工業用といふものではなく、土地の民生にふかくくひ入つてゐる點において充分注目に價するとおもふ。黑光りのある石炭の大塊はなんとかくだかねばならぬ。そのくだいて小さくする道具がこゝにあげた梵子（チョエヅ）のもつとも大きな役目である。もちろん、槌子であるかぎり、なんでもたゝきこみ、たたきわる役目はするわけであるが、石炭わり以外の仕事はいたつて少いのである。大きな鑄物のから、それは適宜の柄をつけたものであるが、そのかたちが金石併用期の鬪斧とまつたくおなじであるからおもしろい。背はまるく、一方ににぶい刃がついてゐる。柄をとほす大きなあな（孔）があり、上面と下面とは切りとつたやうになつてゐる。

赤峰紅山後の石金併用期の石槨墓からの例は東亞考古學會の『赤峰紅山後』にあり、大同からの例は東大考古學研究室の『考古圖編』第五輯圖版5にある。ただ問題は現用のものが單なる槌子であるのに、先史時代のものはおそらく鬪斧であり、また鬪斧からでた權威の象徴でもある點である。私はこゝでまへにあげた狼をつく短劍、また別のところでのべた石庖丁あなぐら（窖）などとともに、先史時代から現代にいたる聯綿たるかたちの上の傳統をみるが、しかも同時に、その用途の上の變遷をみのがすわけにはゆかないのである。

先史時代におけるこの形式の鬪斧は滿鮮にもひろがり、またエウラシアにも弘布した武器であつた。いまここにみる槌子は大同以外でまだその例を知ぬ。鑄型は三つあはせで、あたらしいのについてみると瑩に併行してそのづぎ目がついてゐる。